壺形土器の最も華麗な完成された時期とみることができる。平椿式土器の壺形土器は，有文と無文に分かれ，器形上はほぼ統一された形態がみられる。前畑遺跡でみる限り，有文の場合は口縁上端部に粘土帯を輪積み状に貼付して蒲鉾状の肥厚帯をつくるものであり，無文のものは有文と同様の肥厚帯をつくるものと肥厚帯をつくらずそのまま丸みをもって納めるものがある。器形は，細片のため断定は避けたいが，二通りの口縁部器形が確認できる。肩部と頸部の接合部から口縁部へは直上して筒状の口縁部をつくるタイプと頸部から口縁部は直線的に内傾したままでおさめる無頸壺のタイプである。

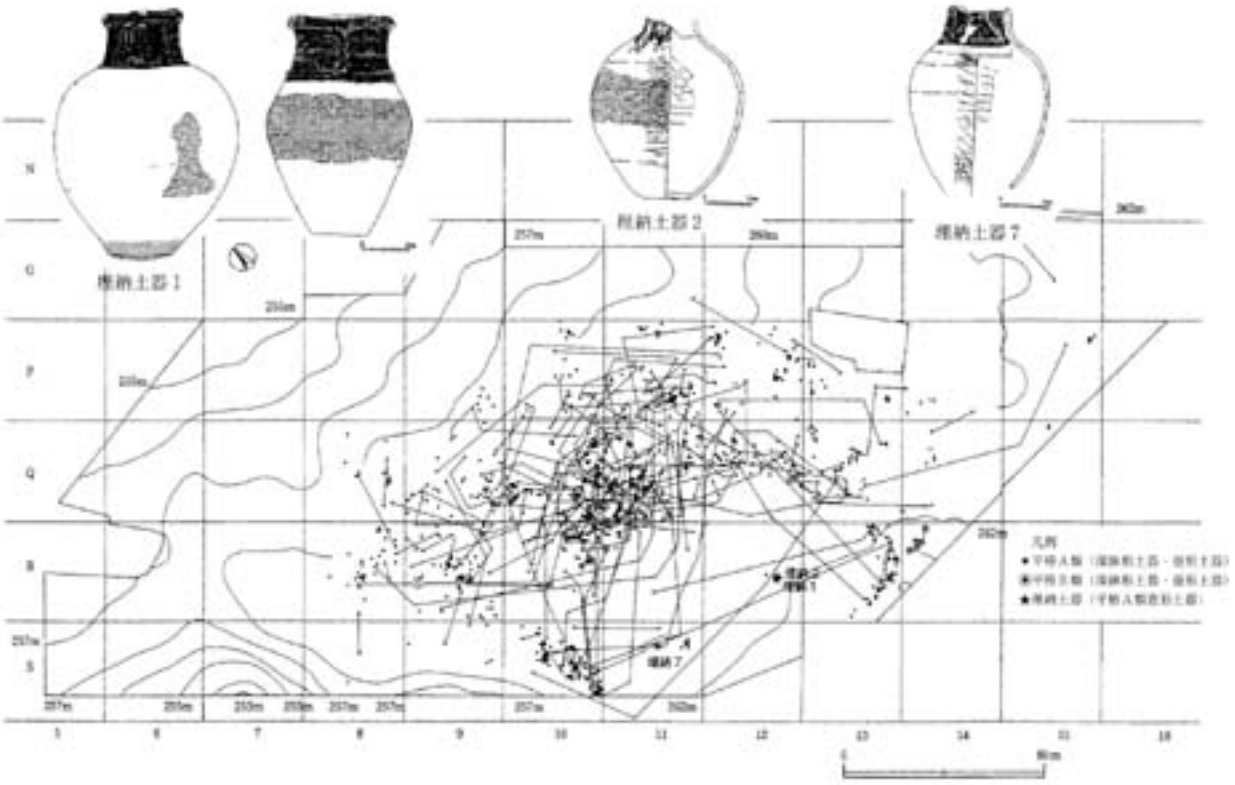
このようにStage３の平椿式期は，上野原遺跡など多くの遺跡で発見されている。口縁部は蒲鉾状の肥厚部分をもつ独特の器形であり，平椿式期の特徴の一つと考えられる。なお，この期の壺形土器には無文土器も確認され，今後，壺形土器の用途を考える上においては非常に重要な要素と考えられる。

石坂上式土器は，口縁部はほぼ先行する平椿式土器に類似するが，胴部文様は後続の椿ノ原式土器に類似する。口縁部文様は，凹線文で直線や曲線を描く。胴部文様は，幅２cm程度の縦位の撚糸文を４～５本を束にした撚糸文帯と無文帯を交互に施文する。そして，この文様帯の上から３～６条の凹線文を横位に巡らせるが，途中で渦文や菱形文を描くのが大きな特徴である。志布志町下田遺跡で石坂上式土器の壺形土器が供伴しているが無頸壺で，頸部には刻目を付けて幅広の突帯文を巡らせる。椿ノ原式土器の微隆起突帯文の粗形的な観がある。

このようにStage４の石坂上式土器は，下田遺跡の１例ではあるが，深鉢形土器の特徴の違いから類別できるものであり，今後の資料の増加が期待されれる。

椿ノ原式土器期の壺形土器は，別府（石踊）遺跡と塚ノ越遺跡で知られていたが，城ヶ尾遺跡や灰塚遺跡などでは埋納壺（埋設壺）も発見されている。また，西北限で最も遠隔地の長崎県百花台遺跡でも出土し，後続の土器型式も含め最も注目される段階である。この期の壺形土器の文様は，刻目を有する微隆突帯文を巡らすものと１条から２条の凹線文を巡らすものがある。いずれも椿ノ原式土器特有の文様を使用しており，この型式に属する壺形土器と考えられる。器形は，口縁端部が外方に拡張して平坦な口唇部面をつくり頸部から口縁部へ内傾したままでおさめる無頸壺のタイプがある。

このようにStage５の椿ノ原式期は，ＡとＢの二つのタイプにほぼ分離される。Ａの場合は口縁端部の細かな形態の違いは若干みられるが，Ｂの場合はほぼ定まった無頸壺様



第６図　上野原遺跡の平椿Ａ・Ｂ類土器の壺形土器等出土配置図［原図＝鹿児島県埋蔵文化財センター2001より］